たまごは
しあわせに
なりたいの

三日月てりり

たまごは　しあわせに　なりたいの

たまごの話

三日月てりり

たまごはまず割られて溶かれて、熱々の蒸し暑い焼き焼きフライパンで身も心も灼熱地獄に陥る夢をみて叫んで起きたの。ああ、夢だった。辛く激しい夢だった。私はたまご、という名前。だからか時々玉子料理扱いされる夢をみて、朝から苦しい気持ちになってしまうのだけど、そんなこと気にしてたら生きていけないから、なるべくすぐに楽しくて嬉しくて生きていたくなるようなことを考えることにするの。

幸せを集めて楽しく嬉しく過ごしたい。ふわふわのぬいぐるみ、きれいなお洋服、胸ときめく雑貨に、キラキラのアクセサリー。映画も好きだし、ご本も好きよ。アートの展示もよく観に行くし、お歌とか、お芝居とか、パフォーマンスみたいのも面白い。そういうもので日常をいっぱいにして、それだけをずっと楽しく楽しく感じていたいの。たまごは幸せ蒐集家。

たまごの生活は、ずっと楽しいことばかりで、ちやほやしてくれる男性たちもいたりして、それは一緒にご飯を食べてくれる人がいることだから、とっても嬉しいよ。一人でご飯を食べるのって、気づいてしまったら、寂しいもの。それでいつも楽しく過ごしてるけど、時々、言葉にできない不安に襲われて、私はなんで生きてるんだろう、とか、私はなんで生きていられないはずの人なのに生きてるんだろう、とか、生きてる価値が無いのになぜ生きてるのかって言われたけど本当に私はなんで生きてるんだろう、とか、生まれてくる価値も無いのに何故生まれてきたって言われたのも、ほんとになんでなんだろうな、って思いながら、ギュッと体の震えを抑えるように自分を抱きしめて、よしよし、いい子だよ、生きてていいんだよ、生きる価値はあるんだよ、って、自分に言い聞かせてると、そのうち眠ってしまったりして、そうすると、気づいた時にはもう、朝が来ていて、私は、ああ、昨夜あんなに苦しかったけど、目が覚めたらあの苦しみはどこかに行ってしまっ

てるし、きっとあの苦しかった時に私は死んでしまって、きっとその後で生まれ直してきたんだな、朝になったら転生したんだな、同じ体だけど、きっと魂は生まれ直してきたんだ、それが目覚めるってことなんだ、って、そんなことを思って、また一日楽しいことをし続けるの。悪夢に侵されてしまわないように。

しょうゆの話

たまごを時々誘ってくる、しょうゆ君っていう男の人がいるんだけど、今日はしょうゆ君の話をしてみるね。

しょうゆ君は私の事が好き、なんだと思ってた。だっていつも私を誘うし、ご飯とかデートとか、そういうのを求めてくるのって、私のこと好きだからだと思って、嬉しかったのね。でもなんだか、一緒に映画に行っても、食事をしても、なんだかちっとも楽しくなくて、切なくて悲しくて辛くて耐えられなくて泣き出しそうになってしまったり、もうそれ以上一言も言葉に出来ない気持ちになって、押し黙ってしまったり、そんなことばかりで、私、どうしたらいいか、もう全然わからなくなってしまった。しょうゆ君は、これはこうだ、って、私がそう思ってないことだって、こうなんだ、って思い込んで、そういうものだとしか思えないの。そんなものじゃないことに気づくことも出来なくて、そんなものじゃないことに気づいてる私を否定して、そんなものじゃない現実を否定して、そうじゃないって、彼の中にある彼にとっての思い込みだけを信じるために、私にまでそうであると思うよう無言で強いてくる。嫌なの、そんなの。私に私が思う私の価値観を思わせてお

いてくれる自由を、彼はどうしたって否定しないではいられない。だから、私、しょうゆ君がいない世界に行きたい。私、本当に、本当に、どうしても、だめだ。

夜になって、苦しくなって、うなされて、私、またこれできっと死ぬんだなって、感じながら意識が失くなった。

目が覚めた時にはやっぱり、また、全ては過去の事になっていて、もう昨日までいたあの人が誰だったのか、わからなくなっちゃった。

そーすの話

たまごのお友達の、そーす君、今日はそーす君とご飯を食べるのね。

時々一緒にご飯を食べるお友達なんだけど、なんだかちゃんとしたお仕事をしているみたいで、私そういう人ってあんまり知らなくて、そんななんか、ちゃんとした人？ なんて、どうお話したらいいのかわからないけど、でもなんだか、メニューで迷って何を頼んだらいいかもわからない私を気にも留めないで、店員さんに、これとこれ、なんて私の分まで決めて注文してくれちゃって、それで、えっ私の食べたいものが分かったの？？？ なんて思っていると、たしかにそんなに外れてない感じのものが出てきて、これが食べたかったんでしょう、なんて見透かしたようなことを言ってくるの。私は、そんなにそれが食べたかったのかな、私、って思いながら、でも食べてみたら案外悪くない気もして、私はそれが食べたかったの

かもしれないな、なんて思ってみて、それはそれで楽に過ごせるようにしてくれてるのかなって、でもそれって本当にわたしのことわかってるのかなって、本当に私が食べたいものがそれだったかどうか、私、わからなくなっちゃって。

私が本当に食べたかったものってなんだろう、私が食べたくて、楽しみにしてたはずの何かがあったはずなのに、でも私、もう、それが何なのか思い出せない。誰かに私はこういうものが好きなんだ、って思われてしまっただけで、もう、そうじゃない自分なんかいちゃいけないんだって、そんなふうに思ってしまって、私は私の思うままの私でなんていられなくて、苦しくて、切なくて、悲しくて、私は私が食べたかったものじゃないものを、勧められるがままに食べてきた、そんな人生だったのかな、って思ってしまったら、もうそれきり、私、何も食べたくなくなってしまって、何も食べられなくなってしまって、それで私、それからずっと、何も食べられなくなってしまった。

私、飲み物は飲むの。お水でいいの。お酒は気持ち悪くなっちゃうから飲みたくない。食べ物は、ダメ。固形のものは、もう、見るのも嫌で、気持ち悪くて、私にはそれを食べる権利なんか無いって、どうしたって思ってしまってる。ヨーグルトならどうかなって、お水みたいなものじゃないって、思おうとして、自分に暗示をかけてみるんだけど、やっぱりだめ。だってヨーグルトは水じゃないもの。そう思ったらもう、水分以外の成分のあるジュースやスープやあれやこれ、みんなもう、嫌になってしまって、まっさらな水じゃなきゃ飲む気になれなくて。そのお水だって、何かお水じゃない成分が入ってるのが嫌で、お金を払って天然の澄んだお水を買うことしかできないし、だからって天然なら本当にきれいなお水なの？ って思ったら、不安で、震えて、もうお水だって飲めやしない。だから、私、もう、餓死するしか無いって、思った。

めんどりの話

意識が朦朧として、泣いてるの、あはは、なんだろうね、これ、なんなんだろうね、泣いたって何も解決しないのに、それでもどうでも涙が止まらなくて、とにかく誰かどうにかしてって思ってしまって、それでもどうにもならなくって、誰も何もどうしようもないもの、お母さんだって、私が何かすることを全て無意味だって、私が知らないところで全部断って、ダメにして、親だからやめさせます、って台無しにして、私が楽しくしてることだって、何かに夢中になるのが心配だって私がやめるまで私を異常者扱いして、ご飯も作ってくれなくて、それでやっと私が望みを全て諦めて何もかもどうなってもいい、そう言って全部手放して、初めてにっこり笑ってくれて、喜んでくれて、私にごはんを食べさせてくれて、それで私は何もかも諦めなくちゃ愛してもらえない、私は私を全部手放して好きにさせてあげなければ生きることさえも認めてもらえないし合いしてもらえないし、そんな私に生きる価値とか、意味とか、望むこととか、私に望まれた人は必ず私から諦められてしまう苦痛を味わわされてしまうんだから、それも私から、だからそんな私なんて生きてちゃいけないし早く私を、死なせなくちゃって、私の大好きな人達のために、私は一刻も早く死んであげなくちゃならないって、そう思って、いつだってそう思っていたのに、それなのに私、今の今まで死ぬことの辛さに打ち勝てなくて、いつまでも私、生きてちゃいけないのに生き続けてしまって、そんな私なんて、なんで、生きてるの、今、なんでいまわたし、死ねてない、こんなにお腹が空いてるのに、それでも私、なんで生きて、なんで生まれさせられて、望まれてもいないのに、私のことを価値もないのに生まれてきたって思いたい人の思いを満たしてあげるために自分を殺し続けて、そうなった理由って、そもそも私が、父のない子、だからだって、母親がそう思ってる信念を、そんな子を幸せにしてはいけないと、そう思い続ける気持ちを台無しにすると、母親はもっともっと私を捨てて、傍にいることすら放棄して、私を、生きる価値の無い子だって、もっともっと本質から、もっともっといろいろな意味で、もっともっと私を捨て去って、もっともっと私から生きる意味を失わせるため

に、私を、いつまでも永遠にこの世界から失わせて、私が生まれた意味も、生きた価値も、望みも、思いも、救いも、全て何もかも全部、私は、棄却されて、だから、どうやったって、おかあさんは私を愛してくれないの。

おんどりの話

お父さん、という言葉なんて、私は持ってなかった。だってそんな存在、私にはいなかったもの。その、オトウサン、という音の連なりは、妄想患者の幻想の中にしか存在しない、実際には居もしない、絵とか、抽象的な概念とか、そういうものでしか無かったし、そもそも自分に関わりのない関係性の存在を、居て当たり前みたいに思う押し付けをしてくる、この世界の大多数を占める異常者達、となんて、私、関わりあいになりたくないんだもの、どうしてそんな居もしない人のことをとやかく言われなきゃならないの、私にどうしようも出来ないことなのに。どうして私に不遇な境遇の責任を求めてくるの、私はその不遇な境遇を生み出した人じゃないのに。どうして去っていった人にその責任を求めず、去られた側に去られた償いを求めるの。そんなことを求める異常者達に、私は用は無いんだよ。私が必要とされなかった責任を私に取らせようとするのはやめて、私を必要としなかった人なんて、そもそも私の世界には、存在しないんだから、私を必要ない人だと規定する論拠だって言説で、私を規定しないで、どんな風に認識したって、私が私の当たり前の世界を生きてることを、私を勝手に定義して、こうだとか、違うとか、どんなことを思ったって、そんなの全部間違ってるんだから。

はむの話

私、病院で目が覚めたの。どうしてなのかわからないけど、誰かが通報して、私、救急隊に部屋の鍵をこじ開けられて、救出されたんだって。それで、栄養の点滴をされてるの。不思議だね、点滴で栄養をとってると、何も食べて無いのに食べたくならないの。不思議な気持ち。ずっとこのまま、ゆったりと死ねたらいいのにね。

そんな気持ちで、ふふって笑ったら、同じ部屋の人から話しかけられたの。すごく太った人で、そう、私が知ってる人の中で、一番太ってる。こんなに太った人が生きられるんだって、それはもう、本当にびっくりして、お返事できなくて、ただ見つめてしまったら、ずっと話かけてくれたのね。その人は、はむ君ってお名前で、やっぱり食べるのが大好きな人だった。そしてね、私にね、食べることがいかに楽しいか、嬉しいか、幸せか、話して聴かせてくれたの。食べることは、命を繋ぐこと、って。命を繋ぐことが、幸せを感じ続けるための、一番大事な土台なんだ、って。私、それで目から鱗が落ちたような気持ち。だって、そうだよね、幸せを感じるためには、生きてないとならないんだもの、生きていたくないだなんて、幸せを感じられなくなることでしか無かったんだもの。私、あんまりにもおかしくって、あんまりにも悲しくって、、体中のちからを全て使って泣きながら笑っちゃって、お腹が痛くなっちゃって、もう、体力なんか残ってなかったから、気を失ってしまったの。そうしたら、気づいて、目が覚めたら、はむ君が、食べ過ぎで死んでしまっていたの。私、悲しくって、悲

しくって、涙がもう、枯れ果てたはずなのに、それでも涙が止まらなくって、私、やっと、生きる手がかりを見つけたのに、はむ君は、もう居なくって、私、私、本当に、もう涙が止まらない。

きみとしろみの話

私、生きる力を手に入れたと思う。私は生きていいし、幸せになっていい。私が生きて喜びに囲まれた生活をしていいって、私は伝えてもらったんだもの。それから私、とっても悦楽的な、喜びに満ち溢れた生活を、たっぷり送っているの。私が心地よく感じる場所で、快く思う人とばかり、時を過ごして、いつも笑って、過ごしてきて。そうして出会った人々の中で、特に興味を惹かれたのが、きみ、と、しろみ、の双子。きみは、愛くるしい瞳のとってもかわいらしい女の子で、しろみは、スマートな物腰のとってもかっこいい男の子。に、見えるのだけど、本当は、そうじゃないのだって。きみはどこまでも愛らしくかわいいのに男の子で、しろみは女の子の理想の男性そのものなのに、女の子なんですって。私、この双子に夢中なの。二人は二人とも私を愛してくれて、私、この二人とずっとずっと一緒に遊び暮らしたい。毎日楽しく歌って踊って戯れて、いつまでも喜びに溢れて暮らしたい。未来なんてわからないけど、私、二人とならずっとずっと楽しく暮らせると思う。私もいれて三人で、ずっと暮らしたい。ずっとずうっと、いつまでだって。こんなに素敵な二人とだったら、私、きっと幾つになっても幸せでいられるわ。もしも私が16歳とか、18歳とか、20歳とか、それより先のどんなに何もわか

らない未来になったって、ずっとずっと、幸せでいられるわ。

しあわせの話

私たち三人には、きっと、遠くない未来に、もっと幸せが訪れると思うの。たまごにも、きみにも、しろみにも、子供が出来て、きっときっと楽しくすごせるの。それにしても、私、名前をなんてつけたらいいのかしら。たまごの子って、ひよこなの？　しろみの子はしらこ？　しらす？？？　わたし、ちっともわからない。それでもいいわ、だって私、もっと幸せになるんだもの。生まれてくる命はみんな、それだけで、祝福されているのだもの。生きてるだけで、幸せなになれるんだもん。いっぱい食べて太っちゃっても、全然かまわないのよ。幸せになって、いいんだから、ね。はむ君。

おしまい

奥付

著　者　三日月てりり

発行者　三日月てりり

発行日　平成二十八年五月五日初版初刷発行
　　平成二十九年五月十六日第二版初刷発行

連絡先　e-mail: teririweb@gmail.com

たまごは
しあわせに
なりたいの